神々の住む島

動物応用科学科4年　山田穂高

8 月の中旬ちょうどお盆の時期、私は金華山に夏の調査に出向いていた。雨でないのはありがたいが、肌がひりつくほどに日差しは強い。暑さに辟易としながら海岸線を歩いていると、売店を営んでいるおじさんを見かけた。いつものように挨拶をすると、おじさんは海を指差しながら言った。

「あそこに漁船が見えんだろ、南から来て北海道に向かう船は金華山のそばを通るときに山に向かって拝むんだ」

海の方に目を向けるとけっこう大きな漁船がゆうゆうと牡鹿半島と金華山の間を進んでいた。船はゆるやかに速度を落としたと思うとその場で旋回を始め、船首をこちらの方に向けてぴたりと止まった。

「毎年この時期になるとマグロ漁船が通んだが、金華山には海の神様がいるからな。大漁と航海の安全を祈って頭をさげんだ」

とおじさんは船に向かっておどけて手を合わせてみせた。遠いので見えないが船の上の人たちも、こちらに向かって手を合わせているのだろう。

聞けば金華山には神様がたくさんいるらしい。30 近い神々が奉られているそうだ。なかでも山頂には弁財天という女の神様がおり、漁業関係者は海上での安全を祈って定期的にお参りをする。漁業に限らず、自然を相手にする職業についている人たちはこういう儀式を大切にしているみたいだ。

神主さん曰く、神様は形のないものであり、人に思われるからこそ存在価値があるもので、人に忘れられてしまったら存在できないものらしい。私たち若い世代はともすればこのような信仰や伝統を軽視したり、忘れたりしてしまいがちだと思う。けれど、この地域にはそれらがいまだに根強く残っている。多くの人がこの金華山という霊峰に対しての感謝や畏敬を忘れずにもち続けている。それならばきっと、この金華山の大地にはいまだに神々が宿っているのだろう。そう思うと踏みしめる大地から不思議なエネルギーを感じた。